NON NOVEL

NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に〝否定〟を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の〝おもしろさ〟とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい〝おもしろさ〟発見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—135

長編冒険アクション小説　対馬沖ソ連艦に突入せよ

定価690円

昭和56年10月30日　初版第1刷発行

著者　川又千秋

発行者　伊賀弘三良

発行所　祥伝社

〒101　東京都千代田区神田神保町3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (265) 2081 (代表)

印刷　萩原印刷

製本　明泉堂

万一，落丁・乱丁がありました場合は，おとりかえします。Printed in Japan.
0293-200135-3440
© Chiaki Kawamata, 1981

編冒険アクション小説

馬沖ソ連艦隊（アクチューブリ）に突入せよ

又千秋

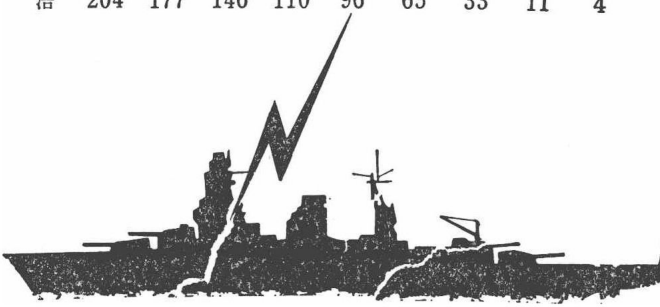
祥伝社

この作品はフィクションです。特定の個人、団体、国家にはまったく関係ありません。

目次

プロローグ　4
1章　非常呼集　11
2章　戒厳令下　33
3章　闇の戦線　65
4章　作戦名〝春の稲妻〟（ベセンナヤ・モルニヤ）　96
5章　暗躍　110
6章　夜襲　146
7章　ATAC（アタック）出撃　177
8章　血まみれの旗艦（アクチューブリ）　204

カバー構成・CE〈小松原京子〉　イラスト・貝原浩
本文イラスト・ふじさわ由満（しまう）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

プロローグ

1

Опáсность（アパースナスチ＝危険）

赤いペンキでそう書かれた鉄のハッチまで、十メートルと距離はない。

「行け！　突っ込め！」

業を煮やして広田がわめいた。

だが、誰ひとりとして、その命令に反応する者はなかった。いや、できなかったのだ。

正面、わずか十メートル先。そこは、今や、横なぐりの弾丸の雨にさらされていた。

ハッチに突き当たると、通路は左右に、T字型に分かれている。その右奥から、猛射が浴びせかけられてくるのだ。

それ以外、敵の位置も数も、見当をつけようがなかった。

それを確かめようとした工藤は、たちまち死体となって、火花と轟音のるつぼの底に転がっている。そして、なおも容赦なく叩き込まれる銃弾の衝撃で、操り人形のように不様な痙攣を続けていた。

「くそ！」

横島が、顔からゴーグルをむしり取ったのが見えた。その表情は、明らかに死を決意したもののそれだった。

この作戦をなんとか忌避しようとしていた横島である。彼の自暴自棄は、その裏返しであるに違いなかった。南一勝には、それが痛いほどわかった。

死を怖れるあまり、横島は死を選ぼうとしている。死

ぬことによって、一秒でも早く死の恐怖から逃れたいのだ。
「待て、早まるな！」
南は叫んだ。そして、横島の背中に摑みかかろうとした。
だが、遅かった。
南の手をすりぬけ、横島は脱兎のごとくハッチめがけて突進する。
「ばかやろう……」
呻いて、南も床から立ち上がった。
敵の乱射は激しさを増している。
通路によって直角の位置に隔てられているにもかかわらず、敵の弾がめちゃくちゃな跳弾となって南の頬をかすめた。
だが、そんなものを気にしている余裕はなかった。彼の指は無意識の動作で、銃のセレクターのフル・オート位置を確認した。
彼が握っているのはM16A1突撃銃の短小タイプXM177E2である。
原型のM16に比べ全長で二十四センチ近く短い。肩付けしての正確な射撃のために伸縮銃床を引き出しても、長さは八十三センチほどだ。
ちなみにM16は九十九センチ。自衛隊の六四式小銃も同じ全長である。共に狭い艦内での戦闘には不向きと判断されて今回の装備からははずされた。
XM177E2の他に、イスラエル製のウージーやアメリカ製のM3A1などの短機関銃で武装している者もいる。
しかし、全員、携行弾数はそれほど多くない。それを使い果たした後は、艦内でおのおのが自力で武器を調達しなくてはならない。
南もすでに二弾倉分六十発近くを撃ち尽くしている。残りの予備弾倉は二本。
と、いきなり、右の腿に激痛が走った。
たまらず、南は床に這いつくばる。
「横島――っ！」
叫びながら、壁際に転がった。
横島はもう、通路の曲がり角に達し、そこでうずくま

っている。きつく目蓋を閉じ、嗚咽に似た荒い息をついているその横顔が見えた。
「横島！」
南は再び彼の名を叫んだ。
そして、そちらににじり寄りながら、自分の右の腿を指でまさぐった。
どうやら、出血はない。傷を負ったわけでもなさそうだ。
力を失った跳弾か、あるいはなにかの破片を受けただけらしい。
振り返ると、この二人の動きに刺激されてか、他の部隊員たちも、やっと麻痺から醒めたかのようにじりじりと前進してくる。
「そうだ！　行け、突っ込め！」
広田が、馬鹿のひとつ覚えで同じ文句を叫びたてた。
「うるせえ！」
怒鳴り返したのは、なんと横島だ。
「おめえも、そしておめえらも、どうせ、みんなおっ死んじまうんだ。ガタガタ、言うんじゃねえ！」

2

その声は、途中からすすり泣きの調子を帯びた。
「やめろ、横島。退がるんだ」
慌てて呼びかけた南を、ぎらぎらと狂気の光を宿した横島の両眼が、まっすぐに見返してきた。
「そうさ、おめえも死ぬんだ。俺の、すぐ後にな」
言いながら、横島は立ち上がった。
その両手には、すでにピンを抜き取った二発のM67破片手榴弾が握られている。
一瞬、彼の意図を計りかねて、部隊全員が凍りついた。
「や、や、やめ……」
広田の呻くような声。
「いいか、きさま……」その広田に視線を移して、横島はなおも言葉を継いだ。「死んでやる。おめえの思いどおりに死んでやる。誰にも、俺が臆病者だなんて言わせ

ねえ」
言うが早いか、横島は身をひるがえした。
通路に飛び出したのだ。そして、右側に姿を消す。
彼の断末魔のわめき声に、敵の一斉射撃音が重なった。
瞬間、すさまじい爆発音といっしょに爆風が噴き出してきた。
横島につられて中腰になっていた南は、紙くずのようになぎ倒された。
「今だ！　行け、突っ込め！」
なにもかもわからぬ混乱の渦の中で、南は広田の声を聞いた。
広田に対する憎しみが、無理やり、南の目をこじあけた。
その眼前を、幾人かの軍靴が横切る。
南は跳ね起きた。
爆発の余韻で、目の前が一瞬暗くなった。思わず、よろめく。
その肩を誰かが支えてくれた。
「大丈夫か？」
五十嵐の声だ。
「ああ……」
南はつぶやくように答え、足を踏みしめた。銃を構え直す。
ともかく、怪我や異常はどこにもないらしい。耳鳴りは残っているが、物音はよく聞こえる。小さな内装式の戦闘用イヤ・プロテクターのおかげだ。それを装着していなかったなら、両の鼓膜は、爆風によって簡単に突き破られていたことだろう。
南は頭を強く左右に振り、五十嵐の後について歩きだした。
横島の生命ひとつと二発の手榴弾が、敵の銃声を見事にかき消していた。
すでに、ハッチの開閉ハンドルには、二、三人の隊員がとりついている。
「急げ！　急ぐんだ！」
再びわめき散らしているのは、広田だ。
南も奥野とともに、小走りで、ハッチ前の通路に出た。

その時である。
目の隅で、なにかが光った。
本能的に、それが銃の発射炎であることを悟った南は、奥野を突き飛ばして、床に倒れ込んだ。
銃声と同時に絶叫が上がった。
ハンドルにしがみついていた隊員のひとりがあおむけにのけぞった。その肩から吹き出した血煙が、伏せた南の頬に降りかかってきた。
「くそったれ！」
一回転、二回転、横に転がった南は、その姿勢から銃を構えた。
そして、通路の奥へ逃げ込もうとしている敵影に向けて、盲撃ちに近い連射を浴びせた。
手応えは確かにあった。
しかし、同時に天井の照明を撃ち砕いてしまったために、戦果を見定めることはできない。
「もういい、無駄弾を撃つな！」
またしても、広田の声だ。しかも、壁の陰からそれは聞こえてきた。いち早く、そこに避難したのであろう。
南は唇を噛みしめ、わざともう一連射を通路の闇に向けて叩き込んだ。
そして、ゆっくりと立ち上がる。
ハッチの前には、肩を射抜かれた島本がうずくまっていた。右肩だ。
腕がだらりとぶら下がっている。骨を完全に砕かれてしまったらしい。
「島本……」
南は、呆然自失の態で自分の右腕を見つめている島本に近づき、そのヘルメットをこぶしで叩いた。
彼の目に、はっと正気がよみがえる。
そこへ、頬を激しくひきつらせながら広田がやってきた。
「島本、負傷はどうだ！」
そう問いかける。
島本は、力なく首を左右に振った。
「そうか、では、後退してどこかに避難していろ」
広田は素気なくそう命じた。

3

〝後退〟〝避難〟といえば聞こえはいいが、早い話が、足手まといになる彼を見棄てるということだ。

ここにひとり置き去りにされて、生き残れるチャンスは万にひとつもありえない。

島本も、そのことは充分すぎるほど知っているはずだ。だが、彼は素直にこくりとうなずいた。

「よし。おい、おまえら、なにをしている。ハッチを早く開けるんだ！」

島本から目をそむけて、広田は叫んだ。

冷血。それを絵に描いたような男だ。

しかし、だからこそ、総指揮官の朝永は彼を部隊長に据えたのだ。

それはわかっていた。だが、そんなリーダーを上にいただく自分が、南は無性に腹立たしく思えてきた。

南は無言のまま、島本の左の肩に手を置いた。

二人がはじめて言葉を交わした時から、まだ十時間とは経っていない。

あまりにも呆気ない付きあいだった。

その彼と、今度会えるのは、あの世とやらへ行ってからだろう。

南は、島本の肩を一回強く握ってから立ち上がろうとした。その彼の手に、島本の左腕がからみついてきた。

「南さん……」

そう呼びとめてから、島本はいきなり、自分のヘルメットを脱ぎすてた。

そして、左手を頭にやると、自分の髪の毛をわし掴みにし、それを力まかせにむしり取った。

「こ、これ……」

痛みに顔をしかめて、島本は引き抜いたひと掴みの頭髪を南に差し出した。

「なんだ……？」

島本の行動をいぶかしみ、南はゴーグルの下で顔をしかめる。

「……エミコに……エミコにこれを渡してやってくださ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

い」
消え入りそうな声だ。だが、そこには切実極まりない響きがあった。
「エミコ？」
南は思わず息を呑んだ。
「……ええ……自分の妻の名前です」
信じられぬほどの早口でそう告げながら、島本はその自分の頭髪を南の掌に押しつけてきた。
「……エミコ……」
「そうです、お願いします」
言って、島本は唇をひき結んだ。
もちろん、そんなことが許されるはずはなかった。
しかも、島本が〝遺髪〟を託そうとしている南にしたところで、生還の可能性となれば、島本と大して違いはないはずである。
だが南は、それを受け取った。黙って、そのひと束の髪の毛を、野戦服の胸ポケットに押し込んだ。
その時、ようやくハッチが開いた。途端、中から濛々たる水蒸気が吹き出してきて、通路に渦を巻いた。
曇り止めを施してあるゴーグルの視界も、一瞬、その乳白色によって塗りこめられる。
「……エミコ、か……」
その明るい盲目状態の中で、南は、再びそうつぶやいてみた。
それにしても皮肉な話だ。島本の女房の名前が〝エミコ〟だったとは、どう考えても皮肉な暗合である。
（いったい、どんな字を書くのだろう？）
薄れかけた水蒸気をかき分け、壁を手探りしながら、南はぼんやりとそのことに思いをめぐらした。
（……まさか、字まで同じじゃないだろう。恵美子、かめぐらしい名前のはずだ……）
……あるいは、江美子……いずれにせよ、絵美子は案外
だが、弛緩した一瞬はたちまちにして吹き飛ばされた。
重い、機関銃の連射音が、突如、南たちの背後で湧き起こったのだ。

1章　非常呼集

1

「子どもが欲しいわ」
「馬鹿を言うな」
「どこが馬鹿なの!?」
「考えてもみろ、冗談じゃない」
「だから、どうして!?」
「やめよう、そんな話は」
「なぜなの!?　籍を入れてくれとか、そういうことを言ってるんじゃないのよ」
「なおさらじゃないか。生まれた子どもをどうするつもりだ」
「育てるわ。あたしが。ひとりで」
「馬鹿な」
「なにが、馬鹿よ!?」
「なにが不満なんだ？」
「不満だなんて言ってないわ」
「じゃあ、なぜ子どもなんか欲しがる？」
「なぜって……あたし、あなたの思い出が欲しいのよ」
「どういう意味だ!?」
「……あなたが、もしも、いなくなったら、あたし、ひとりぼっちになってしまう……」
「くだらん。なにを言ってるんだ」
「くだらない？」
「ああ。俺はどこへも行きゃあしない」
「だったら、だったら、いいじゃない。一勝さんに迷惑はかけないわ。あたし、あなたの赤ちゃんを産みたいのよ！」
「なんだって、急にそんなことを思いついたんだ」
「急にじゃないわ。前から考えてたことよ」

「とにかく、今、そんな話はやめてくれ。せっかく、久しぶりの夜なんだから」
「ほんとに、久しぶりよね。あなたは、いつだって、出張、出張……この家は、まるで、あなたの東京宿泊所だわ」
「仕方がないじゃないか。仕事なんだ」
「仕事……そうよね……」
「絵美子、お願いだ、やめてくれ」
「……」
「絵美子」
とうとう声がきびしくなった。
南一勝のかたわらで、坂井絵美子は小さく肩を震わせ、そしてうつむいた。
いつの間にか、テーブルの上のキャンドル・ライトは消えていた。
ボリュウムを落としたままのテレビの画面だけが、暗い室内に淡い光を躍らせている。ちょうど、最後のスポーツ・ニュースが始まったところだ。
南一勝は、見るともなしにその画面を眺めやりながら、氷が融けてすっかり水っぽくなってしまったウイスキーのグラスを、口に運んだ。
窓の外を、車が一台走り過ぎた。
と、いきなり、絵美子が彼にかじりついてきた。
「一勝さん、行っちゃだめ！　あたしのそばにいて……」
感情の昂ぶりを抑え込めずに、その語尾が彼女の喉にからんだ。
南の手からグラスが落ちた。
それにかまわず、絵美子は彼の胸に頭をぐいぐいと押しつけてくる。
（酔ったのか……）
確かに、今日の彼女はピッチが早かった。
しかし、酔ったにしても、いつもの彼女とは様子が違う。
（……あるいは、なにかに感づいたのだろうか）
そうかもしれない。
だが、だからといって、南には、とりあえず、どうしてやることもできはしないのだ。

とまどいながら、彼は絵美子の肩を抱いた。それからゆっくりと背中へ回した手に力がこもった。
二人はもつれあいながら、ソファの上に倒れ込んだ。

身体を入れかえ、上になった絵美子は、まるで自分自身を責め苛むかのような激しい動きで昇りつめようとしていた。
そうすることで、あらゆるわだかまりを一度に忘れ去るつもりなのだろうか。そんな彼女に応えようと、南の全身もまた汗にまみれていた。
彼のわき腹に残る鉛色の傷痕が、動きにつれて、まるで生き物のようにうごめいている。そのひきつれを、無意識にであろう、絵美子の指先がしつこくまさぐり続けていた。
とにかく、今夜の絵美子は一途だった。
ひたすら、南をむさぼろうとしていた。
喘ぎの合間を縫って、短い、甲高い悲鳴に似た声が洩れはじめていた。

その時だ。
電話が鳴った。
それは寝室と居間を隔てる壁際に置いてある。二度、三度、ベルがいらだたしげに続いた。
「いや……いや、いや……」
眉間に深いしわを寄せた絵美子は、その汗に濡れた乳房を震わせながら、激しく首を左右に振った。
「いやよ……いや……いや……」
だが、ベルは鳴り続ける。
小さなルーム・スタンドの光に照らされた絵美子の顔が、焦りのために歪んだ。
「……いや……やめて……いや……」
しかし、とうとう、絵美子の首はがくりと前にたれた。そのまま、南の胸の上に崩折れてくる。
呼出し音は、なおも執拗だった。それが深夜の静寂を、いたたまれぬものに変えていた。
「おい……」
南は、ぐたりと全身の体重を彼にあずけたまま身動きしない絵美子に小さく声をかけた。

「……」
絵美子の喉から、わけのわからぬ呻き声が返ってきた。そして、彼女は、ようやくのろのろと腰を浮かせた。二人の結びつきが解けた。
「……ええ、ええ……わかりましたよ……ちょっと、待ってちょうだい……」
誰に言うともなしに間の抜けた声でそうつぶやきながら、絵美子は上半身をゆっくりと起こし、ベッドの端に身体をずらす。そしてものうげな動作で乱れた髪の毛をかき上げた。
呼出し音は、もう十数回に及んでいる。
ベッドから下りて電話器に向かう絵美子のヒップラインを見送って、南はひょいと枕元の時計をのぞいた。
十二時三十分を回ったところだ。
(こんな時間に……)
ずきん、と痛みに似た嫌な予感が胸を横切る。
「もしもし……ええ、坂井ですが……」
ベッドの上であおむけに寝そべったまま、南は、絵美子の応答に耳を澄ました。
「……あら、はい……南はここにおります……はい、いつも、お世話になっております。はい、ちょっと、お待ちくださいませ……」
そこまで聞いて、南は身体を起こした。
「一勝さん。会社の部長さんから……朝永さんっておっしゃる……急用なんですって……」
送話口を手で押さえて、絵美子が小声で南を呼んだ。
「ああ……わかった」
彼は答え、ベッドから床に足を下ろす。
南一勝、三十三歳。
オリエンタル通商という、小さな商事会社の第二営業部で働いている。ともかく、彼の身分はそういうことになっている。
もちろん、オリエンタル通商は実在の会社だ。本社オフィスは新橋にある。ほかに、都内四カ所、全国十カ所の支社、営業所を持っている。
主な業務は、アメリカ製日用雑貨の輸入だ。それを日本国内、および東南アジア各国へ売りさばく。
また、ロサンジェルスに出張所があり、そこではかた

わら、日本製小物のアメリカ国内向け通信販売も行なっている。
オリエンタル通商とは、そうした、レッキとした企業だった。少なくとも、そうした会社として、世間に知られていたのだ。
だが……。
南一勝は、絵美子から受話器を受け取った。
正式に籍を入れてはいないが、彼と彼女は実質的な夫婦である。
会社もそのことは心得ており、彼に支払われるサラリーには、配偶者手当がちゃんと加算されていた。
しかし、絵美子は絵美子で、自分の仕事を持ち、外で働いていた。
彼女は、雑誌社や広告代理店によく名前を知られたフリーのスタイリストだった。収入は南の表向きのサラリーよりも多い。この渋谷区上原のマンションも、彼女がひとりで買い取ったものだ。
二人が知り合ったのは四年前。
出張でロスに滞在中だった南と、コマーシャル・フィルムの撮影に同行して西海岸へやってきていた絵美子は、偶然に、とあるレストランでいっしょになり、互いにひと目で激しい恋に落ちた。それがなれそめである。
帰国後は、絵美子のほうが積極的だった。
彼女は彼の会社を探しあてて、連日のように電話で彼を誘った。
そして、いつの間にか、二人は同じマンションでいっしょに暮らすようになり、南は自分のアパートを引き払って、ここの住所を会社へ届け出ることとなったのだ。
そうした行動は、別段、禁止されていなかった。
一般人の中に融け込み、一般人と同じように暮らす……それが、理想とされていたからだ。
同期の仲間たちも、多くが正式に結婚し、二人、三人と子どもをもうけている者も珍しくなかった。
しかし、南だけは、どうしてもその気になれなかった。それは結局のところ、絵美子を決定的にだまし、裏切る行為に他ならない。
そしていつの日か、だまされたままの絵美子は、彼の正体を知ることなしに未亡人となってしまうかもしれな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton